

『韓国語教育研究』（第4号）別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

モバイル・メッセージを活用した韓国語語彙学習  
—MALLの学習効果と「一口サイズ学習」の設計—

JUNG Jonghee

日本韓国語教育学会

2014年9月

# モバイル・メッセージを活用した韓国語語彙学習 -MALLの学習効果と「一口サイズ<sup>ひとくち</sup>学習」の設計-

チョン ジョンヒ  
JUNG Jonghee

近年、モバイル・テクノロジーを活用した外国語学習及び教育が注目を浴びている。第二言語習得のフィールドでもスマートフォン<sup>1</sup>などのモバイル機器を活用した外国語学習の効果についての研究が盛んになり、このような動きをかつてのCALL<sup>2</sup>からMALL<sup>3</sup>への移行とみなす論調が目立つようになった。しかし、MALLに関するこれまでの研究は「英語学習」を前提としたものが主流を成し、韓国語に適合する「授業の設計」や「評価」についての考察は十分ではなかった。特にKFL環境<sup>4</sup>における教育を想定した場合、いわゆる「通信教育」のような「遠隔授業」は実際に制限が多く、むしろ「正規の授業」におけるテクノロジーの「補助的役割<sup>5</sup>」についての考察が必要となる。本稿では、韓国語MALLの実現、その中でも語彙の学習に注目し、「正規の授業」を補充する授業外活動として設計された「一口サイズ<sup>6</sup>」の語彙学習の学習効果とその評価について考察する。

- 
- <sup>1</sup> インターネット・ウェブ・ブラウジングと PDA の機能を結合した携帯移動端末である。韓国国内では「LG 情報通信」と「SAMSUNG 電子」によって CDMA 方式のデジタル携帯電話に小型 CPU を内蔵したものが開発されたのが最初である。独自のオペレーション・システムで運用され、アプリケーションのインストール・アンインストールが常時可能になった(Jung,2014)。
  - <sup>2</sup> Computer-Assisted Language Learning の略語である。
  - <sup>3</sup> Mobile-Assisted Language Learning の略語である。Chinnery(2006)の言及以降、広く使われるようになった。
  - <sup>4</sup> 本稿では外国語としての韓国語学習(Korean as a foreign language)環境を前提に MALL 授業の設計について述べる。
  - <sup>5</sup> 「補助的」とは「正規の授業」そのものを MALL にするのではなく、授業外活動や課題などで MALL の実施を試みることを意味する。
  - <sup>6</sup> 「一口サイズ」の学習とは「bite-sized learning」の著者による和訳で、学習量を軽量化することによって学習者が学習内容を瞬時に消化できるようにし、また学習内容についての理解や記憶の効率をも高めることが容易になるという授業方法論の性格をもって取り上げられることが多い。

## 1. はじめに

スマートフォンやタブレット PC などで代表される「スマート・デバイス(smart devices)」の飛躍的な発展と普及は広域にわたる社会の各分野でモバイル・テクノロジーが多様に活用される契機となり、このような新しいテクノロジーの登場は「学習目的の活用」においても諸分野の「教育家」、「教育研究者」、「学習者」、または「教育ビジネス」に従事する者の興味をわかせるのに十分なものであった。言語学習、とりわけ第二言語習得のフィールドではすでにコンピュータによる言語学習の「効果」及び「授業設計」について ESL<sup>7</sup>・EFL<sup>8</sup>環境を前提にした研究が行われていた経緯を考えると、Chinnery(2006)以降にみられる「MALL」という一種の「共通認識」は、かつての「CALL」や「ICT<sup>9</sup>」の概念やその研究成果の先端にある、すなわち「第二言語の習得及び教育における『テクノロジー』の有効な活用についての考察」とも言うべきものの延長線に位置する「新しいテーマ<sup>10</sup>」として理解せざるを得ない (Jung, 2014)。ところで、この「新しいテーマ」を「韓国語非母語話者の韓国語学習」に適応して考えていくとするのであれば、少なくともこれに興味をもった者にとってはいくつかの「反省」が先に問われるべきであろう。それは、第一に「かつての CALL による韓国語学習・教育」についての研究が十分とは言えない状態で、「MALL による韓国語学習・教育」についての研究は近年になって注目をあびるようになってはいるものの韓国国内でさえ「量」と「質」に充実した研究成果は見当たらない<sup>11</sup>という現状である。そして、第二は ESL・EFL 環境を前提とした CALL や MALL の「研究方法」、「授業の設計」、「評価」をそのまま韓国語学習に転用することによって生じる「矛盾」ないし「非効率性」についての再考察が

---

<sup>7</sup> English as a Second Language の略語である。

<sup>8</sup> English as a Foreign Language の略語である。

<sup>9</sup> Information and Communication Technology の略語である。

<sup>10</sup> これは単に「新しいテクノロジー」という意味ではない。むしろモバイル・テクノロジーが有する「移動性」、「個別性」などの諸特徴によって CALL や ICT など代表される「テクノロジーの活用による言語学習」で問うべき諸問題が改められたと考えられるのである。

<sup>11</sup> 韓国語 MALL に関する韓国国内の研究成果は学位論文が多く、Park(2012)、Cho(2013)、Park(2013)による韓国語学習アプリケーションの授業法案についての研究、Shim(2013)、Kang(2014)による「モバイルゲーム」と韓国語学習についての研究、Park(2010)による「モバイル環境で行う韓国語教育の教授要目」研究、Song(2011)、Lee(2013)による「リーディング」と「ライティング」についての研究、Kim(2012)による「ポッドキャストを活用した韓国語学習」についての研究などがある。学術誌論文はその数が少ないが Han(2013)などの研究成果がある。

不可欠であることも韓国語 MALL の研究フィールドにおいて問われるべき問題であることは言うまでもない。特に、韓国や日本では「通信環境」が整備され、端末機の普及率と学習者の「デジタル・リテラシー」が良好で、また諸外国語に対する「学習需要」が「制度上」保障されている環境が定着しているため MALL に最適な環境が少なくとも技術的には整備されていると言える。

本稿では MALL 授業の特徴とその学習効果を先行研究から検討し、KFL 環境における韓国語学習・教育を前提に MALL 授業の設計について考察する。「授業の設計」に関しては、2014 年 4 月から 7 月まで著者が行った授業（立命館アジア太平洋大学、「韓国語 1」科目）を事例として挙げる。また事例として挙げる立命館アジア太平洋大学における「MALL 授業」の学習効果についてはその評価と分析方法についての考察を加え、韓国語 MALL の可能性を確認し、これからの課題について検討する。

## 2. 研究方法

MALL の定義と特徴、これまでの研究成果については、1980 年代以降の CALL 研究に注目しつつ、2000 年代初頭における MALL 研究初期のアプローチから Chinnery(2006)によって「MALL」の概念が整備され、それ以降、米アップル社の「アイフォン<sup>12</sup> (iphone)」の登場によるスマート・デバイスの世界的流行とそれに伴う無線ネットワーク・インフラの拡大が顕著になったここ 10 年間の動向を通史的に調査・分析する。また、「正規の授業」における「補助的装置」としてのモバイル・テクノロジーの活用を考える上で、本稿では著者の担当する初級韓国語クラスで行った『『一口サイズ』の語彙学習』を紹介し、韓国語 MALL の実践例として授業の設計と学習効果を図るための「評価」方法について述べる。上記の授業設計については「立命館アジア太平洋大学」における「韓国語 1」科目<sup>13</sup>において 2014 年 4 月から 7 月まで行った課外活動の一連を例に挙げる。

---

<sup>12</sup> 2007 年に米アップル社が発売した。タッチパネルのマルチタッチを可能にし、フルブラウザでインターネットの利用が可能な携帯移動端末として世界的な人気を集めた。最新型は「iphone 5s/5c」で 2013 年に発売された(Jung, 2014)。

<sup>13</sup> APU「韓国語」は 1 コマ 95 分の授業を週 4 回行っている。レベルは「韓国語 1」から「韓国語 4」までの 4 段階となっている。「韓国語 1」を入門レベルとし、「韓国語 4」が最上級である。

### 3. MALLの定義と特徴

#### 3.1 MALLの定義

MALLは「Mobile-Assisted Language Learning」の略語でChinnery(2006)以降、広く使われるようになった。これは1980年代から現在に至るCALL研究の延長線でモバイル・テクノロジーやスマートフォンなどの「モバイル・デバイス」を捉えようとする研究の枠組みとしての性格が表れたもので、「m-learning」が言語学習に限られず広範囲で使われるのと対照的であると言える(Jung, 2014)。最新の研究でMALLの対象となっているデジタル・デバイスといえばスマートフォンやタブレットPCなどの高性能移動通信端末機に加え、SNSやクラウド・サーバー<sup>14</sup>、ポッドキャスト<sup>15</sup>のような通信サービス及びアプリケーション・プログラムなどを指すことが多いが、初期のMALL研究においてはPDA、MP3プレイヤー、DVDプレイヤー、PALMTOP、第二世代移動通信などが主な「モバイル・テクノロジー」として想定されていた。Traxler(2005)は、「携帯用デジタル通信装置を用いて行う言語学習のすべて」をMALLの定義とし、CALLや「e-learning」における学習の「個別化」が持続する上で、「移動性(portability)」に優れた端末機が普及されることによって学習の利便性が増したことに注目している。また、Kukulska(2008)は、MALLは「いつでもどこでも可能な学習」であり、「より非形式的で、伝統的な授業形態<sup>16</sup>から離れたもの(informal learning)」であることに着目し、これを活用すれば「個別の学習目標」に合った学習者中心の教育が可能になると言っている。またCho(2007)は、「接近性<sup>17</sup>」と「移動性」に優れた最先端の端末機が登場したことによって外国語学習に携わる教員や学習者のアプローチも大きく変化していくことと予想し、スマートフォンやタブレットPCで稼働するモバイル・アプリケーションについてもそ

---

<sup>14</sup> Cloud Computing と呼ばれるもので、必要なソフトウェアをパーソナル・コンピュータにインストールせずにインターネットの接続を通じてデータの共有を可能とするものである(Jung, 2014)。

<sup>15</sup> インターネット上の様々なコンテンツをMP3プレイヤーやPMPなどの端末にダウンロードして再生できる技術で、米アップル社の商品である「iPod」と「放送」を意味する英語「Broadcasting」が結合した造語である。「お気に入り」を作成すれば該当するカテゴリーのコンテンツをウェブ上でダウンロードできる(Jung, 2014)。

<sup>16</sup> Kukulska(2008)は「一人の教師に対する複数の学習者」、「教師から学習者への一方的な情報の移動」、「固定した場所と時間」などを「伝統的な授業」の定義として用いている。

<sup>17</sup> あるコンテンツからそれに関連する別のコンテンツへの移行が容易であること。

の活用性について言及している。Warschauer & Liaw(2010)は、「生涯学習<sup>18</sup>」などでの有効性を言及しているが、これはモバイル上で授業を行う、いわゆる「通信教育」のことを指しており、本稿で扱う「補助的手段」としてのテクノロジーとは多少の温度差がある<sup>19</sup>。しかし、同研究者によって言及された MALL の諸特徴は「補助的手段」としてのテクノロジーを前提にした場合でも十分に再考の価値のあるものと考えられる。これについては次の「3.2」で詳しく述べる。

### 3.2 MALL の特徴

Warschauer & Liaw(2010)は MALL の特徴について次の諸要素を挙げている。

- 複合的意思疎通(multimodal communication)を可能にする
- 協同的「作文」(collaborative writing)活動を可能にする
- 言語分析(language analysis)と構造の把握に有効である
- オンライン・ネットワーキング(online networking)を築き上げる
- ワン・ツー・ワン学習(one-to-one)を可能にする

-Warschauer & Liaw(2010).

“Emerging technologies in adult literacy and language education” National Institute for Literacy, pp.1-3.

Warschauer & Liaw(2010)は、以上の諸要素を最大限に生かすためには端末機の操作はもちろん、ポットキャストやウィキス(Wikis)、ブログ(Blog)、機械採点装置(Automated writing evaluation: AWE)、SNS<sup>20</sup>、オンラインゲーム(Online game)などのオープンソース型ソフトウェアの併用が効果的であると指摘する。しかし、モバイル・テクノロジー、すなわちスマートフォンのような端末機や SNS のようなサービスはそもそも学習用途で使われることを想定して設計されたものではないため、

---

<sup>18</sup> Lifelong learning の和訳。韓国では「평생 학습(平生学習)」と言うこともある。

<sup>19</sup> 本稿では、「モバイル上で行う『通信教育』」は対象にせず、正規の授業におけるモバイル・テクノロジーの有効な活用に焦点を合わせることにする(Jung, 2014)。

<sup>20</sup> Social Networking Service とはインターネット上で不特定多数の人々と繋がりをもつことを目的とするオープン型ブログである。韓国国内ではかつて「Cyworld」が「主流」であったが現在は世界的に普及が進んだ「Facebook」の利用率が高い(Jung, 2014)。

これを外国語学習で活用する際には様々な制約を伴う。例えば、無線ネットワーク<sup>21</sup>のインフラが整っていないければ、スマートフォンがあっても優れた教育コンテンツが開発されたところで「無用の長物」になりかねないし、韓国や日本のような比較的無線ネットワーク・インフラが整備されている地域であっても「CPU<sup>22</sup>の速度が遅い」、「液晶の大きさが学習に適していない」、「バッテリーの残量が足りない」、「端末間の互換性が取れない」、「メモリーの量が足りない」などの技術的な諸問題が残るのである (Jung, 2014)。しかし、これらの技術的制約はスマートフォンと無線ネットワークが世界的に普及し始めた 2007 年から徐々に改善されていて、無線ネットワークに関しては AP モードの wi-fi ルーターに加え、広域 Wibro<sup>23</sup>による無線ネットワークのインフラ構築に移動通信社と自治体が共同で取り組むことによって急速な環境改善を図ることができた (Baek, 2010)。上述したように、かつて MALL の最大の課題と指摘されていた技術的制約がスマートフォンの登場から 5 年も経たない間でそのほとんどが改善されたことを受け、MALL は再び学習効果や教授の形態上の問題、いわば「授業形態の多様性を図るための道具」、「学習者の個性を生かし、個々に適合した学習を自主的に設計可能な方法」、「より実在的(authentic)な文脈へのアプローチ」、「社会的背景を考慮した談話の提示」など、本来、真摯に考察すべき本質の問題へと帰着しつつある。

以下は Traxler(2005)による「m-learning」と「e-learning」の特徴を比較したものである。Chinnery(2006)による「MALL」の定義以前のもので、「m-learning」の特徴として挙げられている「状況に合う」、「移動性に優れる」、「インフォーマル学習」、「個々に合わせた学習」などは用語さえ異なるものの、MALL の特徴とも言えることに注目する必要がある。

---

<sup>21</sup> Wi-fi あるいは Wireless Lan と呼ばれるもので Wi-fi とは Wireless Fidelity の略語である。無線接続装置(Access Point: AP)から転送される電波や赤外線を利用し、近距離内で端末を用いたインターネットの接続を可能にする技術のことである(Jung, 2014)。

<sup>22</sup> コンピュータの中央情報処理装置(Central Processing Unit)。

<sup>23</sup> 韓国の電子通信研究院 (ETRI) が中心になって開発した、移動体無線用通信規格 (Jung, 2014)。

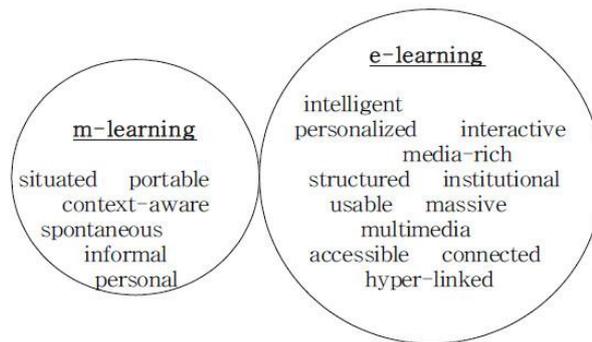


図1. 「m-learning」と「e-learning」の特徴  
 -Traxler(2005) “Defining Mobile Learning”, p.264.

#### 4. MALL 研究の発展と韓国語学習

モバイル・テクノロジーによる外国語学習の学習効果については、PDA、MP3 プレイヤーなどの録音・録画機能を「聴き取り」や「発音の練習」などに活用するなどの取り組みから、その学習効果と学習の設計についての研究が盛んになってきた。特に ESL や EFL の分野に携わる教員・研究者による研究成果が中心となり、中でも CALL による外国語学習の効果に興味を持っていた研究者らはモバイル端末がコンピュータに比べ「携帯しやすく(portable)」、「より個々の学習者に集中できる(personal)」ことに注目したのである。Chinnery(2006)の研究では「MALL」という用語が初めて登場し、「m-learning」、「u-learning」などの用語も混在して使われているが、外国語学習に限ったモバイル・テクノロジーの活用でいえば「MALL」が広く通用するようになった。

Chinnery(2006)以降の研究では、携帯電話、スマートフォン、タブレット PC など、より多様な端末の活用が試みられ、最近ではポッドキャスト(Podcast)、ブログ(Blog)、ソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)、クラウド・コンピューティング(Open-source Software and Cloud Computing)など、端末に拘らない広域に及ぶモバイル・テクノロジーの活用可能性が論じられるようになってきている(Warschauer & Liaw, 2010)。しかし、現状の MALL 研究で最も注目を浴びているのはスマートフォンを活用した授業であり、これは 2007 年に米国のアップル社によって発売された 아이폰(iphone)の世界的流行を皮切りにスマートフォンの普及が加速していったことが背景にある。

モバイル・テクノロジーの活用と韓国語学習に関わる研究は MALL 研究の初期にみられた PDA や MP3 によるものよりスマートフォンやタブレット PC を想定した研究が主であるが、これは韓国国内でスマートフォンなどの新型モバイル機器が急速に普及したことや<sup>24</sup>、韓国政府による「スマート教育推進戦略(2011)<sup>25</sup>」の影響があったものと考えられる。しかし、MALL と韓国語学習・教授に関する研究はまだ乏しく、Cho(2007)、Jang(2011)、Jung(2014)など、韓国国内の MALL 研究もまた韓国語母語話者の EFL 環境を前提としたものが中心となっている。

## 5. 韓国語語彙学習と MALL

### 5.1 「一口サイズ」の韓国語語彙学習

Jang, Won, Jeong(2011)はスマートフォンの諸特性を「一口サイズ」の学習(bite-sized learning)に適合するものと考え、なお「反復練習」が不可欠な語彙の学習においてはスマートフォンのようなモバイル端末の活用が有効であることについて言及している。これはかつて Schmitt(1977)によって提唱された語彙学習の「記憶強化ストラテジー(consolidation strategy)」の側面から考えると一度の学習量を軽量化し、繰り返しこれに触れることによって学習者が「より効率の良い」記憶・認知ストラテジーを持って語彙学習が行えるような環境を整えることを意味する。MOON(2010)は韓国語語彙学習において「インターネット辞書」と「検索ツール」の活用について言及し、語彙の持続的な復習と「強化」にテクノロジーの活用が有効であると言及している。ここでは、モバイル・テクノロジーの発達によってスマート・デバイス上でのフルブラウザ (full browser) インターネットの利用が可能になり、またスマートフォンやタブレット PC の場合はアプリケーション<sup>26</sup>化された電子辞書の利用が一般化していることに注目する必要がある。MOON(2010)は、また「インターネット国語辞典」に「難易度等級の表示」、「高頻度結合構成」、「語用的情報」を一緒に載せることで効果的な語彙学習が実現できると指摘しているが、これは「良質」

---

<sup>24</sup> 韓国は 2012 年 8 月でスマートフォン利用者人口が 3000 万人を超え、2011 年からは段階的に第 2 世代携帯電話の通信サービスを縮小しはじめている (韓国放送通信委員会, 2012)。

<sup>25</sup> 韓国教育部 (現教育科学技術部) は 2011 年に「スマート教育推進戦略」を発表し、公教育におけるデジタル書籍の普及と活用についての政策を具体化していった(Jung, 2014)。

<sup>26</sup> スマートフォンなどで稼働する応用プログラム (Jung, 2014)。

の「辞書アプリケーション」を用いるか、「教師」によって「抜粋・編集」されたコンテンツを学習者に提供することによって現状で実現が可能になっており、MOON(2010)の指摘から現在に至るまでのわずか4年で諸項目の全面的な改善がみられたと言っても過言ではない。実際、韓国国立国語院が監修し、DIOTEK Co., Ltd.<sup>27</sup>が開発した「標準国語大辞典」のモバイル版では、「高頻度例文」を利用者に提供しているだけでなく、「活用情報」、「語源」、「慣用句」、「発音」などを提示することによって韓国語学習者にとって有用な語彙学習のコンテンツが「いつでも」、「どこでも」手に入るようになった。

## 5.2 「一口サイズ」の語彙学習と MALL

MALL 学習の代表的な特徴と言える「移動性」、「瞬時性」、「接近性」は「一口サイズ」の語彙学習を実施するのに適合した技術的環境を構成する諸要素と考えられる。特に「カカオトーク<sup>28</sup>」や「ライン<sup>29</sup>」などで代表される「メッセージ」のようなアプリケーションの多様な機能は学習者の語彙習得と推論能力の発揮を刺激するような情報発信の一連を容易にするのに十分と言えよう。例えば、「プッシュアラーム<sup>30</sup>」は学習者の予想できない瞬間に少量のコンテンツを提示することによって語彙学習への負担を軽減し、学習意欲を刺激する機能的な装置として活用が期待される。学習者は時間と場所にとらわれず「少量」の学習を「頻繁」に行うことで、かつての「伝統的な授業」で扱うコンテンツの受け入れを時空的に分散させることができる。また、スマート・デバイス上で関連情報をみつけることで「二次的」学習を自主的に行うケースも多く、情報の発信者である「教師」が追加的情報を「リンク」することもできる。これらは MALL 授業の長所を生かしたのもでもあり、「一口サイズ」だからこそ期待できる学習効果とも言えるものではなかろう

<sup>27</sup> 音声、筆記、OCR など「感性認識技術」と「多国語コンテンツ」の言語処理を行う韓国のインターフェイス設計会社 (Diotek, 2014)。

<sup>28</sup> 株式会社 KAKAO が提供するグローバル・モバイルメッセージ・サービス (株式会社 KAKAO, 2014)。

<sup>29</sup> Line Co.が開発したモバイルメッセージ。日本で初めてサービスを実施し、世界で4億人以上の利用者がいる(Line Co., 2014)。

<sup>30</sup> 「メッセージ」や「アップデート」などの新しい情報を「音」や「バイブレーション」で知らせる機能(Jung, 2014)。

か。実際、限られた時間で大量の語彙学習が求められるケースでは、「単純暗記」を超える「二次的」学習は期待できないが、これは「時間の制限」のみならず学習者の「心理的負担」にも関わる問題であると考えられる。

## 6. 「一口サイズ」の MALL 語彙学習の設計

本稿では、「一口サイズ」の MALL 語彙学習を設計すべく、正規の授業外における「補助的手段」としての MALL の方法と教師の役割について著者が行った授業例を挙げて考察する。以下は立命館アジア太平洋大学 (APU) 「韓国語 1」科目における「一口サイズ」の MALL 語彙学習の設計と実践の様子である。APU の「韓国語 1」は入門レベルの韓国語学習者を対象に 4 単位の「言語科目」として毎学期、開講される。

### 6.1 MALL による語彙リストの作成

APU の「韓国語 1」は 1 コマ=95 分の授業を週 4 回、1 学期の 15 週間で計 56 回の授業を設けている。受講者は日本人学生であれば誰でも履修が可能で、国際学生の場合は「中級日本語」を履修済みの学生を対象とする。学年は問わない。毎週水曜日と週末の 3 日間は休みであるため、MALL による語彙の提示は第 1 回目の提示を水曜日に、第 2 回目を土曜日にと週 2 回の提示を行う。第 8 週目のクォーターブレイク期間中に正規の授業は行われませんが、MALL による語彙学習は通常通り行った。第 1 週目は文法事項として「ハングルの導入」と「韓国語の音韻」を取り上げ、また MALL 授業の実施に先立ち、メッセージ登録などのテクニカルな環境作りが必要となるため、MALL による語彙学習は第 2 週目からの実施を試みる。従って、1 学期当たりの提示語彙数は 28 語彙・表現になる。提示語彙に関しては『APU グローバル韓国語 1 (コースパック)<sup>31</sup>』で提示されていない初級学習者向けの語彙・表現を選定することによって、正規の授業を補足し、「ハングル能力検定試験 5 級<sup>32</sup>」の受験に向けての対策を図った<sup>33</sup>。初級韓国語学習者向けの語彙の補足に関し

<sup>31</sup> 牧野・孫 (2014). 『Global Korean (コースパック)』立命館アジア太平洋大学. APU の「韓国語 1」で用いる正規教科書である。

<sup>32</sup> 日本で初めて韓国・朝鮮語検定試験として 1993 年 6 月から行われている。レベルは 5 級(初級)

では、ヌリ・セジョン語学堂<sup>34</sup>出版『セジョン韓国語 1<sup>35</sup>』の語彙索引を参照し、『APU グローバル韓国語 1』で提示されない13語彙・表現<sup>36</sup>を選定した。また、従来の授業ではワークシートを用いて作文の学習で取り上げていた15の語彙・表現をMALLによる語彙学習に追加し、計28の語彙リストを作成した<sup>37</sup>。語彙リストは以下の通りである。<sup>38</sup>

表 1. 韓国語 MALL、語彙リスト

授業週間	回次	文法事項 (正規授業)	MALLによる語彙の提示リスト	
			韓国語	日本語訳
第1週目	第1回目	ハングルの導入		
	第2回目			
第2週目	第1回目	은/는, -입니다/입니까?	강의실	講義室
	第2回目	-예요/이에요	대학원	大学院
第3週目	第1回目	이/가, 의, 이/그/저	몽골 사람	モンゴル人
	第2回目	을/를, -(스)바니다/(스)바니까?	오렌지	オレンジ
第4週目	第1回目	도, 안-/지 않습니다	고궁	故宮
	第2回目	에, -아/어 해요	시내	市内
第5週目	第1回目	하고, 안-/지 않아요	모두	皆

から1級(上級)までの難易度に加え、準2級の6段階を設けており、「筆記試験」と「聴き取り・書き取り」の2科目で評価をする(ハングル能力検定協会, 2014)。

<sup>33</sup> APUでは「韓国語 I」を履修した学生に対し、「ハングル能力検定試験 5級」の受験を勧めている。ただし、これは正規の授業における成績評価には影響を及ぼさない。

<sup>34</sup> 韓国の「国語基本法」による公認機関として韓国語教育と教材出版、教員育成などの事業を行っている。

<sup>35</sup> 国立国語院・セジョン学堂財団(2011). 『セジョン韓国語 1』 KasamKorea Communication.

<sup>36</sup> 選定した13の語彙・表現は「가져오다」, 「축구를 하다」, 「강의실」, 「고궁」, 「공무원」, 「낮잠을 자다」, 「대학원」, 「모두」, 「몽골 사람」, 「 시내」, 「오렌지」, 「펜」, 「두껍다」である。日本語訳は<表 1>を参照。

<sup>37</sup> 選定した15の語彙・表現は「죽다」, 「태어나다」, 「사랑하다」, 「담배를 피우다」, 「문제를 풀다」, 「세다」, 「자랑하다」, 「달다」, 「짜다」, 「시다」, 「쓰다」, 「굽다」, 「조용하다」, 「시끄럽다」, 「지루하다」である。日本語訳は<表 1>を参照。

<sup>38</sup> 比較グループとなるクラスではモバイルを活用せず、紙リストで同一の語彙リストを配布した。

	第2回目	있다/없다, 위치명사	펜	ペン
第6週目	第1回目	숫자	공무원	公務員
	第2回目	-시, -분, -부터, -까지, 단위	세다	数える
第7週目	第1回目	-왔/왔어요, -였/이었기 때문에	가져오다	持ってくる
	第2回目	-(으)까요?, -(으)비시다, -고	죽다	死ぬ
第8週目	第1回目	クォーターブレイク	축구를 하다	サッカーをする
	第2回目		태어나다	生まれる
第9週目	第1回目	에서, -고 싶다	사랑하다	愛する
	第2回目	-(으)로, -겠, -(으)시	문제를 풀다	問題を解く
第10週目	第1回目	-(으)십시오, -지 마십시오/마세요	담배를 피우다	タバコを吸う
	第2回目	-(으)러	두껍다	厚い
第11週目	第1回目	-(으)셨습니다/셨어요	달다	甘い
	第2回目	-지만, -지요?	짜다	塩辛い
第12週目	第1回目	-기 전에, 와/과	곱다	麗しい
	第2回目	-(으)니 후에, -(으)려고 하다	조용하다	静かだ
第13週目	第1回目	-(으)면, -(으)면 되다	시끄럽다	うるさい
	第2回目	-(으)르 수 있다/없다	시다	酸っぱい
第14週目	第1回目	못-/지 못하다, 에게/한테, 에게서/한테서	쓰다	苦い
	第2回目	-(이)나, -거나, -보다	지루하다	退屈だ
第15週目	第1回目	-(으)르 겁니다/거예요	낮잠을 자다	昼寝をする
	第2回目	学期末レビュー	자랑하다	自慢する

## 6.2 語彙の提示

2014年春セメスターのAPU「韓国語1」の授業では、上記の「語彙リスト」に基づき、週2回のMALLによる語彙の提示を行った。対象学生は25名で、日本人

学生 14 名、国際学生<sup>39</sup>16 名で構成されている。国際学生の国籍は中国、ベトナム、マレーシア、ウズベキスタンである。第 1 週目の授業で「ライン」上のチャットルームを作り、アクティビティ内容を説明した。語彙の提示は、正規の授業における各課の文法の導入が終わったところで行き、授業中に扱った文法事項に基づく文章の中で新しい語彙を提示した。チャットルームでは返事をしないで質問などがある場合は個別のチャットルームを設けるように指導した。また、提示した文章や語彙は「ライン」の「ボイスメッセージ」機能を用いて教師の発音が聴けるようにした。また学生が自分の発音を録音して送り返すことによって教師からのフィードバックがもらえるようにした。

新しい語彙の提示は「SAMSUNG Galaxy Note 3<sup>40</sup>」の「スクリーンライト<sup>41</sup>」機能を利用して「画面キャプチャー」をしたものにスタイラス<sup>42</sup>(stylus)で手書きしたものを提示した。これは Schmitt(1997)の言った記憶ストラテジーの強化を試みたもので視覚的手段による語彙の「感覚的な受け入れ」を狙った。文章では各「文章成分」と「文法事項」、「助詞」などをそれぞれ異なる色で書き、初級学習者にとって「より分かりやすい」ものにした。学生には MALL 語彙専用の「フォルダー」を作り、提示のたびにこれを保存することでフォルダーそのものが「語彙帳」としての役割を果たすように促した。以下は実際の提示の様子である。



図 2. イメージファイルを使った語彙の提示と「チャットルーム」の様子

<sup>39</sup> APU では「留学生」の代わりに「国際学生」という用語を用いている。

<sup>40</sup> 韓国 SAMSUNG 電子が開発したアンドロイド基盤のタブレット・スマートフォン (SAMSUNG, 2014)。

<sup>41</sup> ギャラクシー・ノートの画面キャプチャー機能。キャプチャーした画面にスタイラスペンで手書きしたものを再び画像として保存できる (SAMSUNG 2014)。

<sup>42</sup> スマート・デバイスの液晶に手書きをするために用いるペン。

文章で使う文法表現は「表 1.」の通り、その週習ったものに限って提示をした。補足説明が必要な時は「メッセージ」機能を使って韓国語、あるいは日本語での説明を補った。

### 6.3 語彙の確認と評価

本稿では、MALL による「一口サイズ」の語彙学習の学習効果を確認するために「プロジェクト技法 (projective technique)」の理論に基づく小テストを行った。その中でも「連想技法 (associate technique)」はある対象の中で記憶に残るものを選ばせるもので、「正規の授業」で言及した語彙と紙で印刷して配った語彙リストの中に MALL で提示した語彙 (test word) を入れ混ぜ、語彙の意味を書かせることによって「どの方法で覚えた語彙をより記憶しているか」を確認しようとした。それぞれの方法で提示した語彙は該当する方法以外では提示しないようにし、重複したものはテストから除外した。また、「完成技法 (completion technique)」の理論に基づいて「括弧埋め」テストを実施し、括弧の中に入り得る語彙場<sup>43</sup> (word field) 内の語彙候補から「どの方法で覚えた語彙を選ぶのか」、また「語彙の選び方において何らかの偏りはあるのか」を確認した。

テストには欠席者 2 名を除く 23 名の学生が参加した。参加者学生には研究の目的については一切言及せず、「抜き打ちテスト」としての実施を図った<sup>44</sup>。「連想技法テスト」では MALL で扱った 28 の語彙に「正規の授業」で言及した語彙と紙で印刷して課題として配った語彙をそれぞれ 28、計 84 の語彙を提示し、すべての語彙に日本語、あるいは英語訳をつけるよう指示した。これを各項目別に 28 点を満点に採点し、23 名の平均をとることで「どの方法で覚えた語彙をより記憶しているか」が明らかになった。

---

<sup>43</sup> 「어휘장」あるいは「어휘밭」。対照言語学の研究対象として考えられてきた。近年では応用言語学において「어휘장」を活用した語彙教育が注目を浴びている。

<sup>44</sup> テストは 2014 年 5 月 23 日 (第一クォーター最終授業日) に行った。

表 2. 「連想技法」による語彙テスト、23 名の成績

学生	MALL 語彙	正規授業	紙リスト
A	22	12	8
B	15	14	13
C	13	17	11
D	18	14	11
E	20	22	13
F	28	14	8
G	26	15	7
H	25	20	19
I	21	12	6
J	19	14	6
K	18	12	8
L	21	20	16
M	24	24	18
N	20	13	7
O	20	8	4
P	21	19	13
Q	17	13	6
R	14	15	7
S	15	13	3
T	21	25	15
U	22	12	4
V	28	22	20
W	26	20	20
平均	20.6	16.0	10.5

テストの結果「MALL 語彙」の記憶が 20.6 点と比較的に高かったが、学生によっては「MALL 語彙」より「正規の授業」で習った語彙の方が点数が高いケースもあった。しかし、「紙リスト」で学習させた語彙に関しては全体的に点数が低く、あまり学習効果がなかったことが分かる。また、平均点では 20.6 点と 16.0 点の近差となった「MALL 語彙」と「正規の授業」であるが、「正規の授業」の点が「MALL 語彙」より高かった学生は 3 名にすぎないことも注目する必要がある。

「完成技法」では「강의실(講義室)」、「오렌지(オレンジ)」、「축구를 하다(サッカーをする)」の三つの MALL 語彙を想定し、括弧の中にこれらの表現を使った頻度を把握することによって MALL での語彙の提示が記憶ストラテジーを刺激する効果があったのかについて分析した。それぞれの語彙は、10 以上の代替可能な学習済みの語彙があることを前提に 23 名中何人が MALL 語彙を用いて文章を完成させたかを確認した。以下は 3 語彙の代替可能な学習済みの語彙リストと MALL 語彙を用いた学生の数を示したものである。

表 3. テスト語彙と代替可能な学習済みの語彙 (各 10 語彙)

テスト語彙	代替可能な学習済みの語彙リスト
강의실 (講義室)	교실 (教室), 학교 (学校), 학원 (塾), 도서관 (図書館), 대학교 (大学), 대학원 (大学院), 집 (家), 사무실 (事務室), 회의실 (会議室), ~호 (~号)
오렌지 (オレンジ)	사과 (リンゴ), 배 (梨), 딸기 (苺), 포도 (ぶどう), 참외 (甘瓜), 수박 (すいか), 복숭아 (桃), 체리 (チェリー), 살구 (杏子), 바나나 (バナナ)
축구를 하다 (サッカーをす る)	야구를 하다 (野球をする), 배구를 하다 (バレーボールをする), 농구를 하다 (バスケットボールをする), 스키를 타다 (スキーをする), 탁구를 치다 (卓球をする), 자전거를 타다 (自転車に乗る), 수영을 하다 (水泳をする), 헬스장에 가다 (ジムに通う), 골프를 치다 (ゴルフをする), 조깅을 하다 (ジョギングをする)

表 4. テスト語彙と「括弧埋め」にこれを用いた学生数

テスト語彙	강의실 (講義室)	오렌지 (オレンジ)	축구를 하다 (サッカーをする)
学生数	17	9	11

23名のうちテスト語彙を用いて「括弧埋め」を行った学生数はそれぞれ「강의실(講義室)」17名、「오렌지(オレンジ)」9名、「축구를 하다(サッカーをする)」11名となり、これらの語彙以外にまとまった数字で頻繁に使われた語彙がないことを考えると MALL 語彙を記憶している学生の割合が高かったと言える。ただ、「오렌지(オレンジ)」に関しては「사과(リンゴ)」を用いた学生が8名と多かったが、これは『グローバル韓国語』教科書の「位置関係」の説明で「リンゴ」と「箱」を用いた練習があることに起因するものと考えられる。なお、このテストは文法上の誤りは無視した上で語彙の出現のみを数えたものとなっている。

## 7. まとめ

以上で MALL の特徴と韓国語授業における「補助的手段」として MALL の実現について「一口サイズ」の語彙学習の実例を中心に述べた。限られた状況での授業の設計における語彙リストの語彙数が十分ではなかった点、学習効果の確認方法における質的調査の方法論に基づく小テストが MALL 授業の有効性を図る明確かつ十分な手段になっていない点に関してはこれからの研究で補充をしなければならない。また、MALL 授業の運営においてチャットルームでの学生の質問を受けなかったことについては、MALL の長所でもある「相互作用の機能」を教師自らが阻止したものと云わざるを得ない。メッセージャーの特性によるものではあるものの、今後この点については更なる工夫が必要とされる。しかし、韓国語 MALL についての研究および実験的な授業報告が皆無に等しい状況の中で、本研究を通して韓国語 MALL の可能性を示すきっかけを作ることができたという点では一定の成果があったものと考えられる。また MALL 研究の主流が「英語学習」を前提としたものに偏っている状況を打破し、「韓国語学習」、「韓国語教育」での実現に取り組む

ことによってより多様な形での MALL、MALL 研究の発展を図ることができたのではなかろうか。これからの韓国語 MALL に関する研究ではその「効果」がより明確に証明できるような「評価法」の開発とともに、「語彙学習以外での MALL の活用」、「より MALL に適合した教育コンテンツの開発」、「韓国語学習に適合したテクノロジーの開発」など、多様なアプローチを背景とした活発な取り組みが期待される。

### <appendix 1.> 小テスト用紙

1. 以下の語彙の意味を日本語/英語で書いてください。分からないものは空欄にしておいてください。

강의실		전화하다		봉투		여자		탁구를치다		팔	
사람		버리다		공무원		세다		과제		두껍다	
대학원		살다		소금		은행		교실		머리	
사과		사다		펜		가져오다		담배를피우다		달다	
책		시원하다		구름		죽다		말레이시아		따뜻하다	
마시다		몽골사람		비		통장		문제를풀다		짜다	
예쁘다		중국인		모두		땅		엄마		좁	
물		고궁		배		축구를하다		딸기		굽다	
하늘		답다		고양이		춡다		돌아가다		꼭	
컴퓨터		오렌지		시내		태어나다		사랑하다		조용하다	
카드		한국어		펜		웃다		할머니		여기저기	
자랑하다		베트남		낮잠을자다		가다		개		시끄럽다	
남자		음식		쥐		작다		교과서		다같이	
휴지		숙제		종이		지루하다		쓰다		시다	

2. 以下の ( ) の中に適当な言葉を書いてください。

- ① 어디에서 공부합니까? / 저는 ( )에서 공부합니다.
- ② 무슨 과일을 좋아해요? / 저는 ( )을/를 좋아해요.
- ③ 스포츠를 하세요? / 네, 저는 ( ).

<appendix 2.> MALL授業で配った「個人情報の提供に関する案内・同意書」

韓国語 I

担当 : JUNG Jonghee (チョン・ジョンヒ) jungjh@apu.ac.jp

個人情報の提供に関する案内・同意書

今学期では授業時間外の韓国語学習の新しい取り組みとしてスマートデバイスやメール、アプリケーション、各種モバイルコンテンツなどを活用していきたいと思っております。そのためには講師と学生のモバイルデバイスの連動が必要となるため、上記のような課外学習コンテンツの提供を希望される方は①携帯の電話番号と②ライン、カカオトークなどのメッセージングアプリケーションIDを記入してください。

※APUの学生は指導教員に対し、個人情報を提供する義務はありません。希望者に限って同意書を作成してください。

※学生の個人情報は、講師からの学習コンテンツの提供、学習コンテンツに関する質疑応答以外の目的で使われることはありません。

※コンテンツの提供を希望されない場合でも通常の授業および評価で不利益になることはまったくありません。

※コンテンツの提供を希望するが、スマートフォンなどの端末を持っていない場合は相談してください。端末をお貸しします。

(端末の貸し出しはオフィスに来てもらって、指定された時間内にコンテンツを利用し、その場で返却しなければなりません。)

端末の貸し出しを希望する方はここにチェック→

私 \_\_\_\_\_ は、上記の諸事項を理解し、

(your name)

以下の個人情報を提供します。

携帯番号	KakaoTalk ID	Line ID	Email Address

※すべての項目を書く必要はない。

. April, 2014.

(signature) \_\_\_\_\_

## 参考文献

- 国立国語院・セジョン学堂財団 (2011). 『セジョン韓国語 1』 KasamKorea Communication
- 韓国教育學術情報院 (2011) 「スマート教育・グローバル動向2012年6月第1号」 ソウル: KERIS
- 韓国教育學術情報院 (2011) 「スマート教育・グローバル動向2012年6月第2号」 ソウル: KERIS
- 韓国教育學術情報院 (2011) 「スマート教育・グローバル動向2012年12月第1号」 ソウル: KERIS
- 韓国放送通信委員会 (2012). 「無線通信サービス統計現況 (2012年8月)」 ソウル: 放送通信委員会
- 牧野美希, 孫進姫 (2013) 『グローバル韓国語』 大分: 立命館アジア太平洋大学
- Agnes Kukulska-Hulme (2008), Lesley Shield, An Overview of Mobile Assisted Language Learning: from content delivery to supported collaboration and interaction, *ReCall*, Vol. 20, No. 3, pp. 271-289.
- Baek Jonghyun (2010). Study on analysis of wireless internet service market and plans for activation, Seoul: KSII. Vol.2010 No.6, pp.281-285.
- Cho Seikyung (2009). Current Status and Future of MALL, Seoul: Multimedia Assisted Language Learning. Vol.10, No.3, pp.187-201.
- Cho Seikyung (2009). Smartphones used for foreign Language Learning, Seoul: Multimedia Assisted Language Learning. Vol.12, No.3, pp.211-228.
- Cho Seikyung (2013). Social networking sites and foreign Language Learning, Seoul: Multimedia Assisted Language Learning. Vol.14, No.3, pp.315-334..
- George M. Chinnery (2006). Emerging Technologies Going to the MALL: Mobile Assisted Language Learning, *Language Learning and Technology*, Vol. 10, No. 1, 2006, pp. 9-16.
- Han Sangmee (2013). A Study on the needs and perceptions of Korean Learners on Mobile Learning, Seoul: Yonsei University.
- Jang Eunjee, Won Eunsok, Jeong Dongbin (2011). The Effect of Using Smartphones to Assist Lexical Inferencing Strategies in Vocabulary Learning, *Modern English Education*, 12(3), pp.342-367.
- John Traxler (2005), Defining Mobile Learning, *IADIS International Conference Mobile Learning 2005*, International Association for Development of the Information Society,[Qawra, Maldives], pp.261-266.
- JUNG Jonghee (2014). Studies on MALL Theories and Conceptual Design of E-Mentor: Focusing on English Education for EFL Learners, Seoul: Korea University.
- Kim Juri (2012). A study on learning Korean by using Podcasting, Seoul: Hanyang University.
- Lee Mi Sook (2013). A study on using smartphones for improvement of Korean writing skills: Focused on KAKAO Talk, Cheongju: Chungbuk National University.
- Moon Keum-hyun (2010). The present condition and challenges of Korean vocabulary education. *The Language and Culture* 6-1: 109-135.
- Park Jun-Yeong (2012). Korean onomatopoeia and mimetic word contents composition method for mobile-based learning, Daejeon: Graduate school of education paichai university.
- Park Yuhjin(2013). Analysis of Exemplary Cases of the Role and Use of Mobile App and Social Media in Korean Language Education, Seoul: Ewha Womans University.
- Schmitt, N.(1977). Vocabulary learning strategies. In N. Schmitt & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition, and pedagogy* (pp.199-227). Cambridge: Cambridge University Press.
- Shim Yunjin (2013). The effect of the Korean vocabulary learning using mobile game application, Seoul: Ewha Womans University.
- Song Jong-younn (2011). Design and implementation of educational contents for Korean listening of foreigners, Pusan: Pusan University.
- Mark Warschauer, Meei-Ling Liaw, “Emerging technologies in adult literacy and language education.”, *National Institute for Literacy*, 2010, pp.1-3.
- <ウェブサイト>
- 株式会社 Samsung 電子[<http://www.samsung.com/sec/>](2014年6月3日).
- 株式会社 DIOTEK[<http://www.diotek.com/eng/>](2014年8月1日).
- ハングル能力検定協会[<http://www.hangul.or.jp/>](2014年7月22日).
- KAKAO Corporation[<http://www.kakao.com/talk/>](2014年8月1日).
- Line Corporation[<http://line.me/ko/>](2014年8月1日).

(立命館アジア太平洋大学)

## 韓国語教育研究（第4号）

2014年9月15日 発行

発行者 姜 奉植  
発行所 日本韓国語教育学会  
〒161-853 東京都新宿区中落合 4-31-1  
目白大学外国語学部韓国語学科  
編集者 『韓国語教育研究』編集委員会  
文慶喆、柳朱燕、金恵鎮、金鉉哲、宋貞熹  
印刷所 株式会社 仙台共同印刷